

大学における子育て支援の取り組み（1）

－北陸学院大学における「赤ちゃん・サロン」の試行と環境づくり－

Building a Supportive Environment for Child Rearing at the University (I)

－ A Trial of the “Baby Salon” and Creating a Designated

Space at Hokuriku Gakuin University －

熊 田 凡 子^{*1}、山 森 泉^{*2}

要旨

本学における乳児の親子を対象にした試行的支援事業「赤ちゃん・サロン」は、参加する保護者には育児の休息場としての機能がある。学生にとっては、自身が作成した教材実演の場として環境を考える機会、また親子とのかかわりを通して乳児期の発達の実感し、保護者との子育てを共感する基礎力を培うことが期待できる実学的な場である。半年間の試行を振り返り、アンケートや記録、特に、学生が思い描いたサロン環境図から、「赤ちゃん・サロン」への参加は、実習とは異なる主体的な環境構成や乳幼児とのかかわりなどの実践が可能な、新たな学びの環境と位置付けることができる。

キーワード：子育て支援(child rearing)／

3歳未満児(children younger than three years old)／サロン(lounge)

1. はじめに

平成26年4月に「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示され、0歳から小学校就学前までの子どもの発達の連続性を考慮した教育及び保育の展開が求められるようになった。保育者養成校においては、実習のみならず、乳幼児期について継続的・実践的に学ぶ機会の提供がこれまで以上に必要とされる。その背景として、社会の変容に伴い、個人が自由なライフスタイルを選択できる反面、孤立した環境における育児不安、虐待など、人間関係の未成熟による多くのひずみも生まれていることがある。また昨今、人間関係の希薄さを当たり前のことと捉える風潮も問題視されている。このような状況の中、人と人とのかか

わりの大切さ、特に乳幼児期からの保護者支援の重要性が叫ばれ、保育所、幼稚園、自治体、大学等では多様な子育て支援が展開されてきている。「地域子育て支援事業」に関する厚生労働省通知¹では、市町村が行う子育て支援に関する基本事業として、以下の4点すべてを行うことを挙げている。それらは、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進 ②子育て等に関する相談・援助の実施 ③地域の子育て関連情報の提供 ④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施、である。では、保育者養成校ではどのような子育て支援の取り組みが考えられるであろうか。

保育者を目指す本学の学生の動向は、地域の高齢者及び乳幼児のかかわりや体験学習を中学・高校時代に経験した上で入学するというケースが、近年多く見られる。しかしながら、実際に保育実習等において学生が子どもとかかわっている記録及び実習先からの学生の評価等からは、一部の学生を除き、かかわる対象となった相手（乳幼児及び施設利用者）を心の底から愛おしく思い、向き

^{*1} KUMATA, Namiko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
乳児保育、保育内容・言葉

^{*2} YAMAMORI, Izumi

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育実習、日本語表現法、国語

合っている様子が感じられない。現在の学生には、乳児とのノンバーバルなかかわり・交流よりも、言語中心のやり取り・口先だけの応答、あるいは自分が作った教材を演じることで子どもを引き付けようとする物のやりとりに頼った学びを「保育の達成感」として捉えがちである。

保育者養成校として、学生に獲得させる保育観がこのような考えに立つものでよいのであろうか。本学には、学園内に幼稚園が併設されており、実習やボランティア活動を通して幼児期を対象とした実践的な学びの場は身近にあるものの、乳児期に関する学びの場が確保されていない。これまでの本学における子育て支援の取り組みでは、以下のようなものがある。主に発達の問題や悩みを抱える親子や保育者を対象とした相談・研修を目的に行う「あそび場J O J O」や「MAGONOTE塾」、また地域が主催する子育て支援のイベント等に参加する「クリエイショングループ」、あるいは、子育て中の親子を対象にしたイベントに学生が企画から参加する私立幼稚園協会の取り組み「幼稚園ってどんなところ? (通称: 幼どこ)」、金沢市社会福祉協議会保育部会が中心となって開催する「子どもすくすくランド」など。この他にも「金沢市教育プラザ富樫」の事業と連携した子育て支援イベントの開催(ふれあいカレッジなど)などが行われてきた。いずれにおいても、学生にとっては、直接乳幼児や保護者と接することができ、学生自身が作成した教材等を実演するなど、自ら考えたことを主体的に行うことができる機会となっていると思われる。また親子とのかかわりを通して乳幼児期の発達の特性を実感し、保護者との子育てを共感する基礎力を培うことが期待でき、特に、実習先ではできない、学生が「保育者として親子を迎える側の意識に立った実践」が可能となるであろう。しかし、実際には、その時の思いや考えを発揮した「経験」に留まっており、子育て中の保護者、とりわけ乳児期の保護者の思いを直接感じたり考えたり、その背景までを推察するといったことには至っていない現状である。

これらの現状を踏まえ、本学としては子育て支援にどのようにかかわるのが望ましいだろうか。学生の学び舎である大学内であれば、普段の環境

であるから伸びやかな自分らしさを失わずに、出会う親子、特に保護者の思いに近づくことができなだろうか。また、本学には乳児期の親子を対象とした子育て支援の場が欠けているが、それを設けることは保育者養成において今日的意義があるのではなかろうか。

筆者らは、このような思いを起点に、乳児期の親子を対象とした本学における親子支援活動「赤ちゃん・サロン」²を本研究の中心的活動として実践の試みを考えた。「大学がキャンパス内で行う親子支援」と「学生の乳児理解の育ち」という2つの観点に立ち、実践的に探究・支援をすることを目的とした取り組みである。

本稿では、平成26年9月から平成27年3月まで試行的に行った「赤ちゃん・サロン」の活動記録及び保護者と学生を対象としたアンケートの分析を行う。その結果から、学生の乳児期(3歳未満児)の親子に対する理解と、学生のかかわりを通して支援活動の環境を捉える視点の育ちについて考察し、本学の支援実践の特性を踏まえた今後の取り組みのあり方を検討する。なお、試行の成果を継続し、平成27年度も「赤ちゃん・サロン」を開催している。

2. 試行的取り組み

2-1. 「赤ちゃん・サロン」の意義

子育ての「指導」を行う教室型ではない点を重視して行う本学内における子育て支援の取り組みである正式な本事業名を、「ほくりくがくいんだいがく赤ちゃん・サロン」とする。事業の意義は、0から2歳の子育て中の親子が気軽に集い、うち解けた雰囲気の中で語り合うことで精神的な安心感が得られるような環境や、子育ての原点である「愛おしさ」の回復と自己問題解決への糸口になる機会を提供すること、及び学術的視点から問題点・改善点を探ることにある。保護者は他の親子との交流・学生との触れ合いを持ち、自身の子育てを見つめ視野を広げることにつながる。学生は、直接乳児や保護者と接して乳児期の子どもの成長を実感し、また保護者の思いを共感的に理解する力を培う貴重な経験を得る。学生には「保育内容・言葉Ⅱ」「保育内容・環境Ⅱ」「乳児保育Ⅱ」(いずれも3年次後期開講の選択科目)の教

室外体験授業としてこの活動を組み入れ、保育を総合的に捉える目の育ちと乳幼児の連続した発達理解を促す。

これらの意義を確かにするために、平成26年9月から平成27年3月まで毎月1回7ヶ月間、本事業「赤ちゃん・サロン」を試行的に行った。

2-2. 「赤ちゃん・サロン」のプロセスと特徴

本項では、「赤ちゃん・サロン」の活動記録（学生の感想と保護者の感想及び担当教員の記録）をもとに、実施の経過と学生の取り組みのプロセスを述べる。（表1・表2参照）

2014年9月～2015年3月試行的取り組み「赤ちゃん・サロン」記録

◇広報活動（保護者への周知）：担当教員2名から呼びかけ、参加保護者配布予定表、実施報告のホームページ掲載。

◇参加親子数：

表1：月別参加親子数

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
11組	16組	15組	18組	16組	11組	11組

◇参加保護者の構成：固定メンバー＋毎回新メンバー有（保護者の口コミ）平均5名の短大時代の卒業生及び系列校卒業生（平均4名）を含む。

◇活動内容：好きな遊びコーナー・ふれあい遊び・おやつタイム・見て触れて動いてタイム等³

下記表2中の「学生の学び」における網かけ部分は、学生がどのような視点で参加したか、ねら

いを記録したものである。また、「保護者の声」については、各会の終了時に、保護者から聞かれた感想などを記録したものを示した。特に網かけ部分は、本学で行う親子支援の特徴として考えられる箇所であると筆者らが共通して感じ取った部分である。

（1）参加者の特徴

試行的に行った「赤ちゃん・サロン」7回の取り組み記録によれば、保護者の情報源は、担当教員2名からの呼びかけ、参加した保護者に渡した予定表及び実施記録のホームページ掲載のみである。参加親子数は、9月より3月まで表1に示すとおり毎回10組以上の参加であった。参加構成は、固定メンバーに限らず、保護者の口コミにより毎回新しいメンバーが加わった。参加保護者には、本学の卒業生（平均5名）及び北陸学院高等学校卒業生（平均4名）が含まれていることが特徴と言えよう。本学の卒業生には、本学幼児児童教育学科前身の短期大学保育学科の卒業生、また他学科（食物栄養学科、コミュニティ文化学科）の卒業生が含まれている。

（2）保護者の声

毎回、サロンの帰り際に聞き取った感想では、「次回も参加します」や「居心地が良かったです」といった肯定的かつ参加意欲がうかがえ、0から2歳の子育て中の親子が気軽に集える場となりつつあると考えられる。また、「ここだと、他のセンターと違って、遠慮なく食べられる感じがしま

表2：学生・保護者の感想抜粋

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学生の学び	・保護者と話す ・視聴覚教材を演じて子どもの様子を探索	・保護者の会話に加わる ・大型紙芝居を工夫し聞かせる	・保護者と話す ・予想外の子ども様子を知る	・視聴覚教材、卒業研究教材を演じる ・新聞を雪に見立てて遊ぶ環境を用意する	・教材を演じて、乳児期の子ども様子を演じて子どもに近づける	・視聴覚教材や見立て遊び（新聞ハンドル）を用意して遊ぶ ・育児の大変さを知る	・トンネル、視聴覚教材、製作コーナー（シール貼りバック）等、親子の様子を予想し実践する
保護者の声	「何だか居心地がよいので次回も参加します」	「高校時代の同級生との偶然の再会がありました」	「マンションは狭いので、ここでは、たくさん動けます」	「ここだと、他のセンターと違って、遠慮なく食べられる感じがします」	「ここは、ゆったりしていて、心地よいです」	「学生さんの作った物があから、面白い」	「家でできないことができるから、嬉しい」

す」といった、サロン後の開放時間帯に持参したお弁当を気兼ねせず食べることができる、という保護者の声が聞かれた。うち解けた雰囲気では、互いに認め合いゆるし合えるような、見えない空間があるのかもしれない。本学のキリスト教精神における教育の場として、その雰囲気は、知らず知らずのうちに醸し出されている、あるいは、本学及び本学園の卒業生の保護者には、他者を受け入れることができる雰囲気があるのだろうか。いずれにしても、本学における特徴として、その雰囲気は大事にしていきたいと考える。

また、回を重ねる毎に「学生さんのつくった物があるから、面白い」というような、学生の準備する教材等についての感想が聞かれるようになった。乳児向けの玩具や遊具が整っている地域子育て支援センターや子育て広場とは異なっており、保育者を目指す学生の感覚で準備された遊具や視聴覚教材などが目新しく感じられるのであろう。保護者が学生に対して、好意的に受け入れ、かかわろうとしている姿勢が伝わってくる。

(3) 学生の取り組みのプロセス

学生への周知は、2014年度本学幼児児童教育学科4年生の前期科目「幼児理解」の履修者(幼稚園教諭・保育士資格を目指す学生として本学での必修科目)に募集したところ、3名から申し出があった。この3名を固定の学生メンバーとし、担当教員で会の運営を計画した。第3・4・5回では、熊田が科目担当者である「保育内容・言葉Ⅱ」の履修者が、授業の一環として参加した(授業テーマ:「おしゃべりの空間を探る」、「乳児期の言葉の獲得について学ぶ」)。また、第6・7回では、次年度(2015年度)より、「赤ちゃん・サロン」スタッフを希望する幼児児童教育学科3年生4名が参加した。

活動内容は主に、本学担当教員と固定学生メンバーで準備を行ってきた。第1回から第4回までは、担当教員がプログラムを決めた上で、教員と学生とが共に考え合い工夫しながら、好きな遊びコーナー・ふれあい遊び・おやつタイム・見てふれて動いてタイムなどを取り入れた。第5回からは、固定学生メンバーからの要望があり、学生がプログラムに組み込みたい内容を取り入れていくことにした。第7回では、固定メンバーの学生と

次年度からのスタッフを希望している3年生とが共同して環境設定を行った。

(4) 本学「赤ちゃん・サロン」の特徴

本学における子育て支援の取り組み「赤ちゃん・サロン」は、子育ての「指導」を行う教室型ではなく、3歳未満の子育て中の親子が気軽に集えるサロンとしての空間である。特に、参加親子のうち、本学卒業生の保護者は、保育者を目指す後輩への思い入れから生まれてくる興味があり、学生の準備した教材や環境に関心を示す傾向が一般の保護者よりも強く感じられた。また、学生にとっては、自分たちが考えた環境の中で、乳児を持つ親子とのかかわりを通して乳児期の発達の実感することにつながる機会となっている。

学生及び保護者、とりわけ卒業生においては、学内で行っている子育て支援の場であるため、遠慮なく過ごしやすい空間であるという雰囲気が醸し出されており、その雰囲気が、その他の保護者及び乳児にも伝わっていくような安心感があるとすれば、それは本学の「赤ちゃん・サロン」における独自性であると言えよう。

3. アンケート結果より

半年の試行期間に参加した乳幼児の保護者及び運営にかかわった学生を対象に、振り返ってのアンケートを実施した。2014年度に開催したサロンの最後2回の参加時を利用し、質問紙形式でアンケートの回答を依頼した。以下に、結果の概要を記す。

対象:「赤ちゃん・サロン」に参加した3歳未満児の保護者14名、及び「赤ちゃん・サロン」スタッフとして参加した学生7名(保育実習・幼稚園教育実習履修済の学部4年生3名・3年生4名)。

実地日:2015年2月・3月。

内容及び方法:サロン活動記録と年度末実施の保護者・学生のアンケート調査の内、活動への感想及び学生とのかかわりについて、整理・分析し考察する。

(1) 参加学生の育ち: 学生アンケートから

(7名): 親子とのかかわりについて

①サロンに参加した中での親子との交流: 7名

が「あった」と回答し、その内容は表3のとおりである。（複数回答可）

表3：親子との話の内容

	内容	人
ア	子どもの名前・月齢・年齢	6
イ	子どもの好きなこと	4
ウ	食事・離乳食のこと	1
エ	子育ての大変さ	2
オ	抱き方・あやし方	1
カ	成長・発達のこと	4
キ	泣く理由について	2

また、教材等を用いた実践について具体的な内容では、「手遊び・大型絵本」があり、学生の手作り教材では、「パネルシアター・オペレッタ・エプロンシアター・製作遊び」があった。

②「赤ちゃん・サロン」の環境について：次回「赤ちゃん・サロン」を準備するとしたら、どのような環境を考案するかを、学生に環境図で示し

てもらった。

学生に配布した環境図の説明には、次のように書かれている。「パズルマット・椅子をどこに敷くか、積み木や絵本、布遊び、手作り教材をどこに置いて演じるか、こんな玩具や教材及び備品があったらいいなど、自分が環境を設定するつもりで描いてみましょう。自分及びスタッフの動き・予想される子どもや保護者の姿（吹き出しや矢印などを使って、子どもや保護者の思い・会話の雰囲気などを記してもよい。）」

これを受けて学生が描いたものの代表例が、下記の環境図である。第6回終了後に作成した学生の環境図をもとに、スタッフ学生の考えを合わせて検討し、第7回（2014年度最終回）の「赤ちゃん・サロン」では、学生が主体となって環境を設定し行った。（図1参照）

その他にも図2・図3のような環境図もあった。

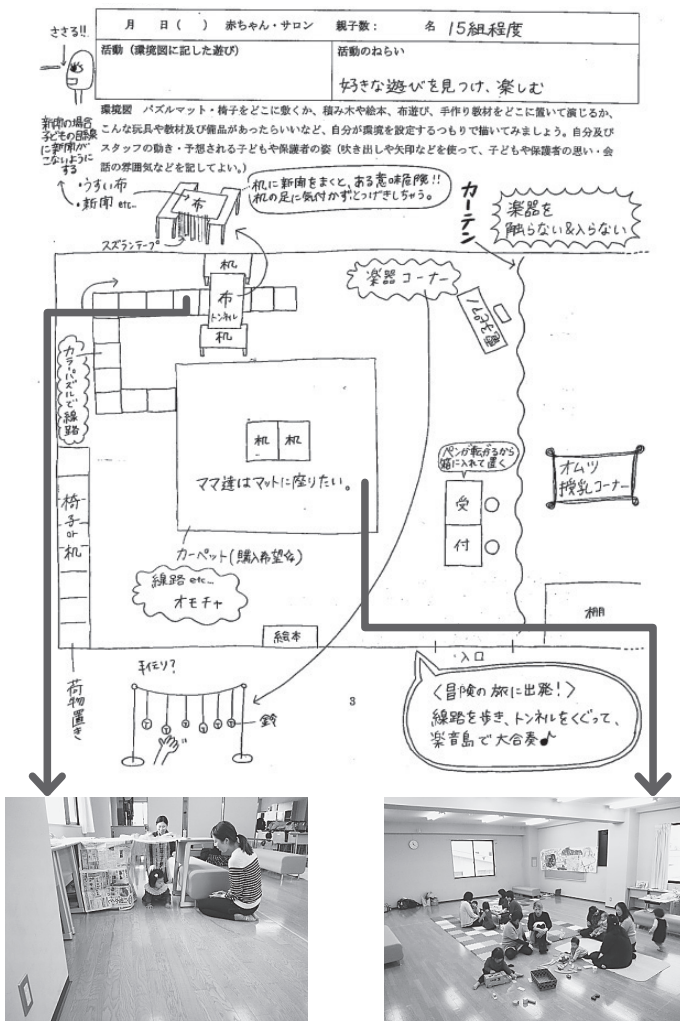


図1：学生が企画したサロンの環境図と実際の様子

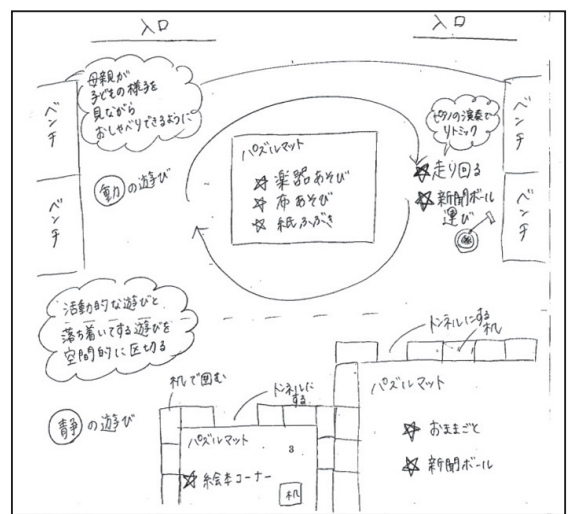
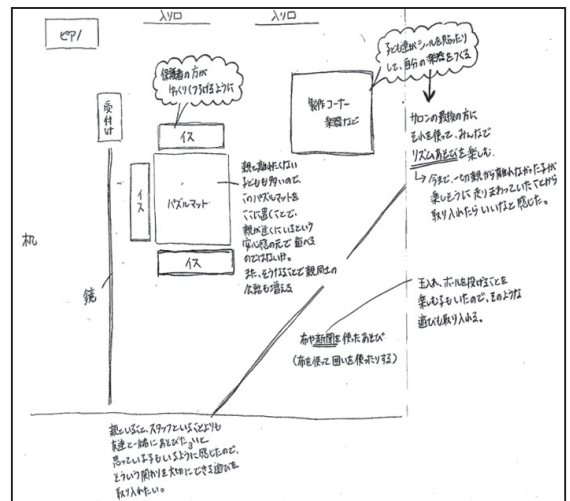


図2・図3：学生たちが考えた環境構成図

学生が思い描く環境図は、様々である。音楽を好む学生は楽器で遊ぶことを考え、製作のコーナーを取り入れたい学生もいる。しかし、いくつか共通した視点も持っていることが分かる。子どもの動きを考えた動線を設ける、少しゆっくり静かに過ごせるような場を考える、保護者がおしゃべりを気軽にできるような場所に配慮するなど、本学における「赤ちゃん・サロン」を通して、学生自身が子育て支援の場所として必要であると考ええる“視点の育ち”があったのではないかと考える。図1は、第7回開催時の様子である。スタッフ学生が考えた環境を協働し、創り上げたものである。

このような学生が思い描いたサロン環境図から判断すると、学生が保育者として親子を迎える側に立った実践が可能であり、乳幼児や保護者とのかわりや環境構成を通して、乳児の保護者の思いを共有し、子育てに共感できる基礎的な力を培うことが期待できると考えられる。

(2) 参加保護者の回答より

アンケートの回答保護者の年齢構成は、20代後半2名、30代前半6名、30代後半3名、40代1名であり、うち11名は親と子どもの核家族である。参加した乳幼児の年齢は0歳2名、1歳～1歳6か月4名、1歳6か月～2歳4名、2歳以上4名と適度なバラツキがあった。「1) 参加学生の育ち」で記したように、学生には成長・発達の生きた教材として非常に有効であっただけでなく、参加した保護者にとっても、同年代の子どもの姿を見たり、保護者同士で情報交換できたりと、参加したことでのメリットを感じやすかったと思われる。また、初めての子育て中の方は半数の7名であり、子育ての不安や悩み解消の場への期待を持っての参加であったと思われる。以下に、各質問の回答数と考察を記す。

①参加のきっかけ：14名の保護者の方から回答を得た。サロンへの参加のきっかけは、「主催者(教員)からの呼びかけがあった」7名、「参加した知人・友人からの呼びかけがあった」7名であり、「ホームページ・チラシ・他の子育て支援の場で知った」という方は0であった。この結果から、最初は口コミでの参加が中心となった。

②参加回数：9月から3月まで(月1回で、曜

日は金曜日に固定)7回開催してきた。このうち3名が6回参加、4～5回参加が6名、2～3回が2名、1回が3名という状況であった。1回だけという方は、県外や遠方在住で実家帰省の折の参加者であることを考慮すると、ほぼ毎回参加している方の比率が高い。試行的取り組みとしては定着率が高いと言えよう。定着率の高さに関連する質問が③である。

③参加しようと思った理由：「知り合いに会える」13名、「知っている先生がいる」11名、「同年代の子どもの保護者と情報交換できる」10名が、上位3位の回答である。これは、①「参加のきっかけ」と関連があり、大学の教員からの呼びかけに応じての参加であり、また参加者が友人・知人に声をかけての参加という、人のつながりの要素が大きい。また、「保護者同士の情報交換」も上位回答であることから、サロン開催の趣旨とも一致しており、今後の開催継続の後押しとなる。

4位以下の回答では、「出身大学(短大)でなじみがある」7名、「楽しい出し物や遊具がある」6名。「同年代の子どもの様子がわかり安心できる」5名、「子育ての悩みを話せる」5名と続き、「育児以外の話もできる」「子育て中の保護者と親しくなれる」各4名の回答があり、サロンが子育ての不安解消の場としての役割を果たしていることが伺える。また、「学生がいる」との回答は4名であり、決して多い数値ではないが、「大学が行う子育て支援」ということを考えると、今後学生のかかわり方次第でこの数字は変動する可能性があると考えられる。その他、「規模が大きくない」2名、「家から近い」1名の回答があった。「規模が大きくない」については、後述する。

④他の子育て支援への参加：「参加している」が13名であり、そのうち8名は「複数の決まった施設に定期的に参加」している。子育て支援(施設・イベント)への参加は、どの保護者にとっても日常的なものとなっており、本学もそのうちの1施設に過ぎないとも言える。

⑤本学と他施設との違い(複数回答可)：最も多いのは「学生の参加がある」11名(④の回答13名中)である。一方、「設備の充実度(他施設の方が充実している)」4名、「他施設は専門スタッフ(子育ての相談が随時可能)」が4名と、本学

に不足している点の指摘もある。しかし、「スタッフの雰囲気」を4名が挙げており、「アットホームで、とてもあたたかい雰囲気大好き」「先生は優しく声をかけてくれたりと、いろんな人と関われる」「なじみやすい」「学生さんたちのフレッシュ感が良い。子どももお姉さんと喜ぶ」との自由記述が得られた。その他、「規模の大小」（本学は小規模である）「特に感じない」と、1名ずつが回答している。

この回答から、本学が目指す「大学が行う子育て支援」の意義が参加者にも浸透していると言える。人的・物的環境から比較すれば、専用施設と専任スタッフを持たない本学は、後述するように不足だらけの環境であることは明らかである。しかし、「人とのつながり」「居心地」を重視するサロンとしては、参加者がその点を理解していることを有難く受け止めている。

アンケートの後半は「学生とのかかわり」に関する質問である。

①学生との交流：10名が「あった」、3名が「なかった」と回答している（1名未回答）。その時の内容（話題）は、「乳幼児の名前・月齢・年齢」を聞くケースが6名〔学生6名〕、「子どもの好きなこと」「好きな遊び」が4名〔学生4名〕と、子ども自身のことを尋ねる内容が多く、保護者・学生の回答が一致している。「抱き方・あやし方」1名〔学生1名〕も一致している。一方、成長・発達（つかまり立ち・歩き始め・歯の生え始めなど）に関する質問が2名〔学生4名〕、「子育ての大変さ」1名〔学生2名〕、「泣く理由について」0名〔学生2名〕は、学生の回答数の方が保護者の回答数を上回っている（表3参照）。その理由としては、子育て支援に参加することを意識している学生スタッフは、ほぼ毎回その時々のおねらいをもって参加しているため、記憶に残りやすいことが考えられる。また、アンケート実施時期に1か月の差があること、学生はアンケート回答時に学生同士で記憶を確認していることなども、回答内容に影響していると思われる。

その他、アンケート最後に設けた自由記述には10名が記入しており、学生とのかかわりに関連して、「お姉さん方にいろいろ遊んでいただき、本人も楽しかったと思う」「毎回の学生さんたちの

絵本の読み聞かせや歌なども聞けて体をゆらしている姿を見ると、こちらもよい気分になる」「若い学生さんと接することがなかったので、とても新鮮な気持ちになった」などのコメントがあった。

②学生の参加について：「適度に学生がいる方がよい」14名と、参加した保護者全員が学生の参加を肯定的にとらえており、学生の学びの場としてサロン開催の理解が得られていることが確認できた。

4. 環境構成のあり方

（1）移動ルート

開始当初より現在まで、サロンを行っている場所（第2多目的教室）は、本学キャンパス内の一番奥の建物3階にある。建物入り口付近に何台かの駐車は可能であるが、大学正面玄関近くの来客用駐車スペースを利用することも多い。その場合、建物の周囲を迂回して数十メートルの距離を、参加保護者の方には、乳児を抱き荷物を持って移動していただくことになる。また、大学の建物内を通る場合でもほぼ同程度の距離があり、駐車場所からサロン会場建物の入り口までの距離は決して短くない。12月～2月の降雪時は、そのわずかな距離も大変だったと思われる。また、建物入口からサロン会場のある3階までは、エレベーター等の設備がないため階段を上るしかない。手すりはあるものの、乳幼児や赤ちゃん連れの親子に優しい環境になってはいない。さらに、お手洗いも乳幼児専用ではないため、客観的には「乳幼児連れの親子にやさしい」とは言い難い。サロン実施に当たり、学科会議においても、参加者の移動の利便性を検討した。駐車場や正面玄関から近く、1階のスペースが使える別棟を利用してはどうかとの提案もあった。しかし、筆者らが考える「赤ちゃん・サロン」は来学する乳幼児親子のためでもあるが、本学に学ぶ学生たちに、乳幼児の姿を身近に見て知ってほしいという願いもある。そのため、一時的な移動の不便さはあっても、学生が普段利用している教室環境で行うことの意義を重視して、正面玄関から最も遠いキャンパス内の奥にある建物（愛真館）の3階にある第2多目的教室を使用していくこととした。

開催場所について、参加保護者はどう感じただろうか。保護者アンケートから抜き出すと、8名は「困ったことはなかった」と答え、6名は「困ったことがあった」と回答している。その内訳は、「3階までの階段移動が大変」が4名と最も多く、次が「幼児の排泄場所（子ども用トイレがない）」が3名であった。

一方、大学内の建物で開催したことで、以下のような点が成果として挙げられるであろう。幼児児童教育学科以外の社会学科、食物栄養学科、コミュニティ文化学科の学生は乳幼児についての学びをしていないが、来学する親子の姿を見て、「あっ、かわいい！」と声を出して反応していること。幼児児童教育学科でも、どちらかと言えば乳幼児への関心が薄い小学校教師を目指す学生が、授業終了後にサロンを覗きに来ること。空き時間や休憩時間等を利用して、教職員が活動の様子を見に来ること。

これらの様子から、大学として行っている子育て支援の活動であることが学内に浸透していき、長い目で見れば若い世代の子育て意識を醸成していくことに、わずかながらも貢献できるのではないだろうか。また、北陸学院には同じキャンパス内（バス停や学生駐車場からの途中）に小学校があり、少し離れて（徒歩4分ほどの距離に）幼稚園があることで、日常的に児童・園児の姿を見る機会がある。特に小学生は食堂が大学の建物内に設置されているため毎日昼食事に利用しており、幼児児童教育学科所属の教授が校長を兼任していることから、2階にある研究室や教材室に顔を出す児童も多く、大学内に児童がいることが日常になっている。その流れから考えると、キャンパス内に乳幼児親子の姿があることで問題になるような点はほとんどないと思われる。

(2) サロンの環境

使用している第2多目的教室はサロンの専用施設・専用教室ではなく、サロンの利用時間以外は、通常の授業やサークル活動に利用されている。この教室の床はフローリング仕様であるため、もともと土足厳禁であり、教室入り口には下足入れを設置してある。来室した乳幼児親子が床に座っての遊びやおしゃべり、乳児の這い這いにもそのまま問題なく使うことができるという利点

がある。（サロン開設日には、学生スタッフが事前に床の拭き掃除を行うなど、衛生管理に注意している。）

従来動き回る活動を含む授業（表現活動、児童文化、レクリエーション関連）での利用を想定して設置された教室であるため、長方形のスペースの横半分を座学用の机配置スペースとして使い、物を置いていない残りの空間をフリースペースとして活用してきた。このスタイルを踏襲して、フリースペースで行うサロンの活動時は部分的にフロアマットを敷き、必要な物品を配置して、準備体制を整えた（3-（1）図1：環境図及び写真参照）。サロン当日出しておく物品は、受付テーブル（学生用の机3）、フロアマット（1メートル四方、4枚～6枚組み合わせで3カ所程度）、小テーブル2（70センチ四方、絵本を並べたり、折り紙をしたり、サロン終了後のお弁当テーブル）、ベンチ4脚（長さ150センチ）のほか、学生手作りの「新聞プール」が常設である。これらは、サロンがない時は四隅に極力重ねて置き、フリースペースには授業に支障が生じないように、基本何も置かない設定にしている。

2015年度からは、学生の準備した教材である新聞プールは折り畳んで専用ロッカーに収納している。これら定番の物に加え、その都度の企画により、絵本を並べたり、スリットドラム（大中小3台）を並べたりしておくほか、スズランテープや何色かのオーガンジーを出しておく、くぐったりまったりと幼児が自由に遊べる素材を提供してきた。

筆者らが先進事例として視察訪問した他大学（短期大学を含む）の子育てひろばでは、大学や自治体のサポートにより、専用室の設置、数多くの遊具・玩具が備えられており、本学のように何もない環境はサロン開始当初は考えられなかった。

しかし、サロンでの時間を過ごしている乳幼児親子の姿や学生のかかわりを観察していると、遊具・玩具が充分になくても、また専用室でなくても、居心地の良い空間設定ができるのではないかと考えるようになった。それは、不便な場所でありながらもリピーター参加者がいることや、アンケートの保護者の声に、「居心地がよい」「ゆった

りして心地よい」「たくさん動ける」にも記されていることから分かる。また、スタッフとして参加する学生からも、物品の不足から環境設定ができないという悩みや苦情がほとんどなかったことから言える。来室する子どもが3歳未満の乳幼児を対象としていることも、多くの遊具・玩具を必要としない一因であるかもしれない。筆者らが担当する保育実習指導の一環として、学生に参加を促している市の子育て広場でのかかわり方も異なる本学独自の「サロン」の形が、参加者と学生スタッフの協働によって創られてきた。

敢えて筆者らの考えを述べるとするならば、本学の教室環境の利点は「何もないからこそ可能」な「自由な環境構成」であり、その中に「参加乳幼児親子の動線を考えた環境構成」を学生スタッフが考えていくことができる点にある。本来が多目的教室であるため、視線の高い位置に掲示物などがなく、自然に座って過ごせる場所となっている。2015年度は学科事業として位置づけられることとなり、予算措置も可能となった。それにより、いくつかの新規購入物品が備えることが可能となる。その際、専用教室ではない点、本学のサロンの目指すあり方をきちんと確認したうえでの購入・設置としていくべきだと考えている。

5. 考察—他大学の支援事業との比較から

大学がかかわって行う子育て支援の取り組みは、近年増加している。インターネットで「大学子育て支援センター」で検索すると、100万件を超える大学名や〇〇子育てセンターという項目が挙がってくるが、そのあり方は一様ではなく、大学の所在地の子育て環境や地域の事情により、さまざまである。また、大学の取り組みとともに、子育て支援に関する調査研究も勧められている⁴。矢萩は、「保育者養成大学との特色ある連携を行っている子育て支援施設」として、熊本市・福岡市の2例を挙げているが、大学内の教室を利用したものではなく、外部施設で大学側の学生・教員・スタッフがかかわりを持つものである。また、パイロット調査として矢萩らが実施したアンケートでは、回答を寄せた73校の保育者養成校（大学、短期大学、専門学校を対象。内大学の回答数は27校）の52%が学外施設に学生を送り出し

ており、送り出していない養成校でも学内での子育て支援活動に学生が参加している割合は、全体の25%であった⁵。また、小原らが行った調査では、キャンパス内で行う子育て支援を、「ひろば」型、「教室」型、「鑑賞・発表会」型の3つに分類して集計しているが、具体的な実施場所（使用教室、専用施設の有無）等については報告されていない⁶。

一方、3歳未満の乳幼児を対象とした子育て支援としては、東京家政学院大学における「ぽかぽかサロン」⁷がある。本学のサロンと共通する部分もあるが、次の2点において本学とはあり方が異なっている。「ぽかぽかサロン」は、10～15組の親子が固定メンバーとして参加する登録制であること、学生スタッフも指定された授業履修者による「固定」メンバーである。

一方、本学は事前予約を受け付けているものの、登録制ではなく、各回新たな参加者がいることに特徴があり、また学生スタッフも「授業」という縛りではなく、子育て支援、乳幼児への関心が強い3～4年生を中心とする「有志」参加である。2014年度は試行的取り組みだったため、口コミでの参加者がほとんどであり、「地域との連携」の面ではこれからである。しかし、登録型ではなくどなたでも歓迎する本サロンの姿勢は、「地域に開かれた」という面で今後も継続していきたいと考える。

さらに、固定ではないものの、ほぼ毎月参加してくださる親子がいることで、発達が著しい乳児期の成長を、学生たちがひと月単位で見てもかかわって学ぶことができた点は何よりの成果である。毎月の参加にもかかわらず、母親の姿が少しでも見えなくなると大泣きをする子どもに関心を持ち、その心情の変化や生育の背景を研究対象として学んでみたいと考えるようになった学生もいる。

これら、本学のサロンの特徴や他大学との比較については、本研究において独自のアンケート調査も行っているため、稿を改めて紹介する予定である⁸。

6. まとめ—今後のあり方の検討

文部科学省が補助金を支出する「地（知）の拠

点整備事業(大学COC事業)」において、今後の方針として「地(知)の拠点大学による地方創生事業」を平成27年度の新規事業に盛り込んだ。その一つに「地域コミュニティ再生型」として、地域医療・介護、子育て支援の課題解決を図る取り組みがある⁹。つまり、冒頭で述べたように、既に厚生労働省において「大学が行う子育て支援」を挙げているが、文部科学省においても「子育て支援に関する課題解決型」として、特に地方の大学の取り組みを推奨している現状がある。このような状況の中で、本学独自の親子支援事業として取り組むのか、あるいは、地域との連携として地元の保育者養成校大学と子育て支援活動を創り上げていくなど考えていくのかは、今後の検討課題である。本学の特性でいうならば、キリスト教主義の大学として、学生と参加親子が育ち合い、信頼し合い、「生きる喜び」の回復の場として祈られていることは重要である。同じキリスト教主義学校である和泉短期大学の子育てひろば「はっぴい¹⁰」においても学生スタッフの祈りから始まるように、本学における「赤ちゃん・サロン」は、学生と親子が育ち合う場として、何が軸であるのかは、確かにしておくべきであろう。

試行的に取り組んできた本学における親子支援事業「赤ちゃん・サロン」は、親子にとっては、子育ての「指導」を行う教室型ではなく、3歳未満の子育て中の親子が気軽に集えるサロンとしての役割があるといえよう。学生にとっては、自身が作成した教材実演の場として環境を考える機会、また親子とのかかわりを通して乳児期の発達の実感し、保護者との子育てを共感する基礎力を培うことが期待できる。特に、先述したように、学生が思い描くサロン環境図で判断すると、実習先ではできない「学生が主体となった環境構成の学び場」であり、また、「保護者から知る」ということが重要な学びとなったが、学生には乳児同士の触れ合いを通しての気づきまでは及ばなかった。今後は、参加学生が乳幼児の発達に関する理論的学びを基盤に置き、実際の子どもの姿から、乳児同士の触れ合いの場は発達を刺激し合えることを学ぶ視点の向上にも期待したい。

(注・引用・参考文献)

¹ 平成26年5月29日雇児発0529第18号「地域子育て支援拠点事業の実施について」、雇児発0521第13号 平成27年5月21日では、「一部改正」が通知されている。

² 本研究は、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業補助金、及び北陸学院大学共同研究費(研究代表者:熊田凡子、共同研究者:山森泉・福井逸子(金沢星稜大学)・西村洋一(本学・本学部・社会学科))の助成により行うものである。本学共同研究における研究代表者の熊田は内容全般の企画と事業運営を担当する。共同研究者の山森は事業運営を共同して行うとともに他大学内の育児支援の状況調査を行う。福井には乳児の発達に関する専門的視点から事業内容の助言及び示唆を得る。西村には本事業の成果のデータ分析について協力を得る。

³ 「赤ちゃん・サロン」の開室時間帯は10:00~11:30(その後13:00まではランチルームとして利用可能)としている。「赤ちゃん・サロン」における好きな遊びコーナーとは、各会において学生が準備した遊び(新聞プール・製作遊び・絵本を置いてある場所・木製の玩具を置いてある場所)のことをさす(10:00~10:30の時間帯)。ふれあい遊びとは、身体と身体が触れ合う遊び方を学生と乳児、あるいは学生が示すことによって親子が遊ぶことをさす。おやつタイムとは、親子にお茶とおせんべいを配布し、こども讃美歌「ちいさいおてて」を歌い、祈る時間帯(10:30~10:50くらい)のことをさす。見て触れて動いてタイムとは、学生が作成した教材に触れる機会、あるいは教材によるお話を聞く時やそのお話から身体を動かして遊ぶ時間のことをさす(10:50~11:30)。

⁴ 矢萩恭子(田園調布学園大学)を代表者とする「保育者養成における子育て支援力の枠組みに関する研究」が、平成26~28年度科学研究費基盤研究(C)課題番号26350053、共同研究者は塩崎美穂、菊地知子、松田純子である。

⁵ 松田純子・矢萩恭子「保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究(2)」『第68回日本保育学会発表原稿』68p 2015年。

⁶ 小原敏郎・入江礼子・中西利恵・直島正樹・石沢順子・三浦主博『保育者養成校が行っている“子育て支援”活動に関する調査研究報告書』(保育者養成における子育て支援研究会)2014年3月。

⁷ 柳瀬洋美「大学における乳児期・子育て支援グループ活動Ⅰー親支援・家族支援の場としての子育てひろば

ー」『東京家政学院大学紀要』第50号、2010年。

⁸ 2015年6月に、注1に記した共同研究の一環として、一般社団法人全国保育士養成協議会に加盟する4年制大学209校を対象にアンケート調査を実施した。回答及び分析等は今後行う。

⁹ 「文部科学省における地方大学活性化への取組③」より。<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/kihonseisaku/h26-10-03/h26-10-03-s6.pdf>
2015年9月30日最終アクセス

¹⁰ 片山知子・大下聖治・相馬靖明・松浦浩樹・矢野由佳子「養成校における子育て支援ー学生と参加親子との実践的関係の場としてー」『和泉短期大学研究紀要』第33号、2012年。

